(E)ISSN: 2181-1784
5(21), May, 2025
www.oriens.uz

REASONS FOR COMING TO JAPAN AND LIFE PLANS OF UNIVERSITY AND GRADUATE STUDENTS FROM UZBEKISTAN

https://doi.org/10.5281/zenodo.15570414

Shunta MIMURA
University of Tsukuba International Public Policy
Student of Master degree

Abstract. *This is the content of my research in the master's program. Policy for increasing the number of foreign students in Japan from countries and regions designated as priority regions since 2010. I will analyze Uzbekistan's highly qualified foreign students in Japan.*

Through fieldwork and interviews, I would like to clarify the reasons why Uzbek students themselves came to Japan, their life plans, and the position of studying abroad in their lives. I would also like to discuss how to support the acceptance and retention of Muslim students in Japan.

1 研究テーマと概要

題目　ウズベキスタン出身の大学、大学院の留学生の来日理由と人生設計~

2010 年以降の日本の留学生政策は重点地域に指定された国や地域からの留学生増加を目指しており、その一つとして CIS 諸国であげられる（松下他、2021）。現在、文部科学省委託事業「日本留学海外拠点連携推進事業(ロシア・CIS 拠点)」や「日本財団　中央アジア・人材育成プロジェクト」などの旧ソ連圏の国々の留学生を対象としたプロジェクトも増えてきている。

本研究ではそれの背景を踏まえ、ウズベキスタン出身の留学生がなぜ日本に留学に来て、どのように今後の人生設計を考えているか、これらを考察していくことで日本とウズベキスタンの大学への留学関係の強化につながっていくのではないか。

先行研究によると CIS 諸国の中でウズベキスタンとロシア出身者が多くなっており、特にウズベキスタンの留学生は 2014 年は 227 人であったのに、2018 年には 705 人、2019 年には 1111 人と著しく増加している（ダダバエフ他、2023;松下他、2021）

「日本留学海外拠点連携推進事業」の対象国の中でかなりの増加も見られ、総数としても多いのにも関わらず、留学生研究は他の地域を対象にしたものが多かった。

またウズベキスタンとの関係性も技能実習生や、労働移民も兼ねた日本語学校への教育移民を中心に研究なされており、大学院生、大学生を対象としたものは少ない。卒論の際には筑波大学院、大学に留学している中央アジアの学生に調査をしていたが、彼らは既存の研究でなされていた労働移民としての性格は珍しく、純粋に留学や研究目的で来ている人も多かった。新しくウズベキスタン人の大学、大学院への留学生を研究することで、彼らの持つ別の目的や考え方を明らかにできるのではないかと考える。

(E)ISSN: 2181-1784
5(21), May, 2025
www.oriens.uz

ダダバエフと園田（2023）が指摘したウズベク人の「*Musofir* 」と呼ばれる宗教的慣習がある。これは非ムスリムが大多数をしめる土地に赴き、修行するというものである。日本に留学に来て、経験を積むことでイスラム教における宗教的修練になるのだ。このような宗教的慣習による留学への影響が実際にどこまで存在しているのか、また同じウズベク人でも非ムスリムとムスリムでどのような違いがみられるのか調査していきたい。

2 背景

日本政府が留学生の受け入れを本格化させたのは 1980 年代からであり、その当時の中曽根首相の元、留学生を年間 10 万人まで増やす「留学生 10 万人計画」が策定され、これは 2003 年に目標自体は達成された。それ以降も年々増加傾向にはあったが、その一方で留学生の出身国は中国、韓国、ベトナムなどの偏っていた（松下他、2021）。

2008 年には「留学生 30 万人計画」が策定され、留学生を育て母国へ帰すという政策から、優秀な留学生を呼び込み日本国内で就職するように促すという政策へ転換した（佐藤、2021）。

そのような背景の中で優秀な留学生をいろんな国から呼び込むという日本の留学生政策は方向づけられていった。その政策の中の一つは「日本留学海外拠点連携推進事業」であり、本研究にかかわるロシア・CIS 地域と指定されたものは 2018 年度に北海道大学が受託したものを、現在北海道大学、新潟大学、筑波大学の三大学によって共同運営されている（松下他、2021）。

また旧ソ連圏を対象とした留学生政策は 2014 年度から 2019 年度に行われた「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」（以下、Ge-NIS プログラム）があり、筑波大学と旧ソ連圏の国々を結ぶグローバル人材育成を念頭に置いた留学プログラムも存在した（臼山他、2020）。

日本の留学生政策は優秀な留学生を呼び込み日本国内での就職や日本語によるコミュニケーションの取れる人材の育成というものが目的ではあったが、コロナ禍を経た 2023 年現在、ウズベキスタンの留学生の来日理由と今後どのように就職などの人生設計を考えているかを調査していく必要がある。

3 先行研究の整理

ゴロヴィナ(2017)は、日本に在住する既婚のロシア人女性を対象に調査し、一部留学生として来日していた人も研究していた。この研究においては来日理由と人生設計について主としていた。ロシア人女性の留学生たちの多くは日本文化への興味と、ロシアから離れ日本へ行くことへ日本語学習などの努力をしてきた、総じて日本語への理解度も高いという共通点があると指摘された。(ゴロヴィナ、2017)

ゴロヴィナの研究していたグループは大学や大学院への留学生であり、このような傾向はウズベキスタンにも当てはまるのか調査していく必要がある。

ウズベキスタンの留学生は日本にある日本語学校への留学が多く、ただの留学生ではなく母国への送金を目的とした労働移民としての側面も兼ね備えており、彼らは概ね日本での生活には満足しているものの、一時的な滞在であり、日本の生活で苦労はしつつも最終的には帰国し故郷に錦を飾るというのが彼らの最大の関心事項であるとされた（Dadabaev,2022; ダダバエフ他、2023）。

ウズベキスタンの留学生研究は日本国内の日本語学校への留学が対象とされており、彼らは日本語力の低さ、日本語学校入学のハードルの低さ、そもそも大学などの別ルートを通じての留学手段の情報の不足などから日本語学校への留学という選択肢を取っていた。（ダダバエフ他、2023）。またこれらの傾向は多くの他の国からの留学生にもある程度見られ、日本語学校の果たす役割というものは大きいものの、労働時間の確保などもあり、日本語をうまく習得できず日本での大学の進学ができないという問題点も発生している。（佐藤、2021）。

しかしながら日本に大学や大学院への留学生としてウズベキスタンから来日する人も存在し、そういった人々の研究も大学へ来る高度な留学生との差異を明らかにしたい。

日本留学海外拠点連携推進事業は日本語学校ではなく大学生を対象にした留学事業であり、この事業を通じて留学生そのものの数自体は増加しているものの、初等中等教育の課程年数の違い、奨学金の不足、日本留学を調べようにも日本語学校への留学の情報しかでないという情報不足という問題は存在している（松下他、2021）。

これらの事業はコロナ以前のものであり、2022 年度でもコロナの影響を受け、留学生の総数は 2019 年の 31 万から 22 万人と減少している中、ウズベキスタンは 3 倍に増えており、ウズベキスタンの留学生はどのように来日し、どのように人生設計を考えているか調査したい。

4 研究の意義と明らかにしたいこと

これまでの調査によると、CIS 諸国の中でウズベキスタンとロシアからの留学生数が増加している。特に、ウズベキスタンの高等教育機関で学ぶ留学生の数は、2014 年の 227 人から 2018 年には 705 人、2019 年には 1,111 人と大幅に増加している（Dadabaev 他, 2023; 松下, 2021）。

1980 年以降に日本にやってきた移民はニューカマーと呼ばれるが、その中でもウズベク人は最も新しく、「失われた 30 年 」を経て 2018 年以降に数が増えている国籍である。この「失われた 30 年 」の間、日本は不景気に見舞われてきたが、本稿ではウズベク人留学生を移民の新しい波の一例として分析し、新しい留学生の動向を考察する。

一方、2018 年以降に増加したばかりの、新たな移民の波ともいえるウズベキスタン人留学生の数は、日本では十分に「準備」されていない（Dadabaev 他., 2023）。

この「準備」とは、移住インフラである（Ling 他., 2017）。

企業などの商業組織、国家や行政機関の規制機構、社会インフラとしての移民自身が持つ人脈、人道インフラとしての NGO や国際機関、技術インフラとしての通信技術や移動手段などである。現

在、彼らがどのような移民インフラに依存し、どのような移民インフラを必要としているのかを明らかにしたい。
またダダバエフと園田（2023）は、最近の留学生の傾向とは異なり、ウズベク人は「*Musofir*」と呼ばれる宗教的慣習として、一時的に海外に滞在し、帰国するという考えを持っていると指摘している。日本政府の思惑通りにはいかず、他地域からの留学生が日本に定住するのとは状況が大きく異なる。高度人材のウズベク人留学生は「*Musofir*」と「ウズベクらしさ」をどのように捉えているのか、同じウズベク人でもムスリムか非ムスリムかの違いでどのような留学生活の違いや進路決定の違いがあるのかを明らかにし、今後増えるであろう日本のムスリム留学生の受け入れに貢献していきたい。

5 問い

留学前

- ウズベク人が日本への留学を決めるプロセスは何か？現在の国際政治や移民インフラはこのプロセスにどのような影響を与えているのか。

留学中

- 彼らは日本での留学経験をどのように捉えているのか。ウズベク人留学生は日本留学に関して、ムスリムとしての価値観から捉えているのか。また非ムスリムのウズベク人はどのように捉えているのか？

留学後

- 留学生の現在の将来設計はどのようなものか。*Musofir* という価値観はどのように作用しているのか？

7 調査方法

現状留学生は日本語学校を対象にした研究が非常に多くなっているが、本研究では日本の大学や大学院を対象に、ウズベキスタンの出身の留学生を対象にインタビューを通じた調査を行っていきたいと考えている。特に「日本留学海外拠点連携推進事業(ロシア・CIS 拠点)」の運営母体である筑波大学、北海道大学、新潟大学に来日したウズベキスタン人留学生を調査していく。

また「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」「Ge-NIS プログラム」などの実際に日本国内で行われている留学生の受け入れを行っているまた行っていた機関の人物への調査も実施し、その当時の留学生や留学を受け入れた人々への調査も進めていきたいと考えている。調査はオンラインを中心に取材を行う。

(E)ISSN: 2181-1784
5(21), May, 2025
www.oriens.uz

8 先行研究文献

英語

Dadabaev, Timur ed. (2022) *The Grass is Always Greener?: Unpacking Uzbek Migration to Japan*, Palgrave Macmillan.

Biao Xiang (2017) *Migration Infrastructure.* The International migration review 48(1):122-148.

Mazzarol Tim. & Soutar Geoffrey. (2002) *"Push-pull" factors influencing international student destination choice*, International Journal of Educational Management, 16(2), 82-90.

日本語

臼山利信・松下聖（2020）「筑波大学「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」の成果と課題」『復言語・多言語教育研究』第 8 巻、117-128 ページ.

厚生労働省(2019)「ウズベキスタンとの協力覚書」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188516_00007.html.

ゴロヴィナ・クセーニヤ(2017)『日本に暮らすロシア人女性の文化人類学―移住、国際結婚、人生作り』明石書店.

佐藤由利子（2010）『日本の留学生政策の評価―人材養成、友好促進、経済効果の観点から』東信堂.

佐藤由利子(2021)「留学生 30 万人計画の成果と課題－成長戦略、大学のグローバル化及び日本語教育との関係からの考察－」『日本評価研究』第 21 巻 2 号、103-116 ページ.

出入国在留管理庁(2022)「出入国管理統計統計表」https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250011&tstat=000001012480&cycle=7&year=20220&month=0&tclass1=000001012481.

文部科学省(2020)「日本留学海外拠点連携推進事業」
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1405546.htm .

ダダバエフ・ティムール,園田茂人(2023)『ウズベク移民と日本社会』東京大学出版会.

松下聖・臼山利信・笹山啓 （2021）「CIS 諸国からの留学生受入れ拡大と日本社会に与える影響：日本留学海外拠点連携推進事業（ロシア・CIS 拠点）の活動に基づく考察」『外国語教育論集』第 43 巻、3-12 ページ.